

発行：熊谷市立江南文化財センター

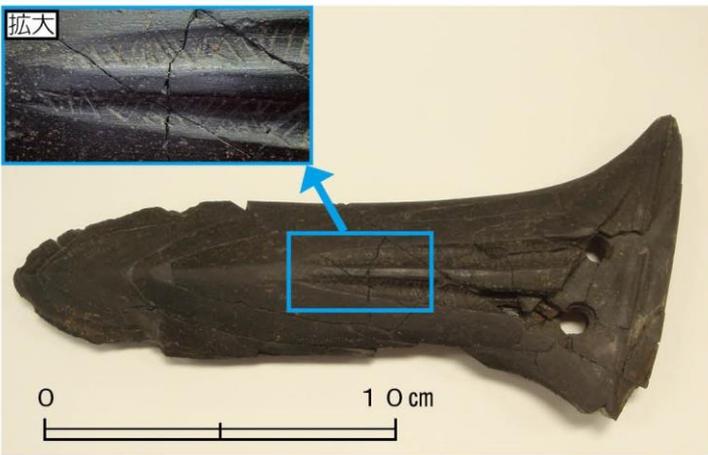
## TOPICS

### 全国初！文様の描かれた「石戈」(せっか)が出土！

市内上之では土地区画整理事業を進めるにあたり、工事によって遺跡が壊されてしまう前に発掘調査を実施しています。平成 27 年 5 月から 7 月にかけて実施した前中西遺跡の調査では、弥生時代中期後半（約 2,000 年前）の竪穴住居跡から、なんと全国初！となる文様の描かれた「石戈」(写真)が出土しました。

石戈とは、弥生時代に中国や朝鮮半島から伝わった武器形青銅器の銅戈を石で模倣して製作された日本独自の祭器です。前中西遺跡では、すでに県内初の例として破片が 1 点出土していることから今回で 2 例目です。しかし、今回見つかった石戈は、ほぼ全形が分かる上に複合鋸歯文(ふくごうきょしもん)と呼ばれるギザギザの文様が溝の中に描かれており、こうした石戈は全国初です。

今回見つかった石戈は、現在速報展として熊谷市立江南文化財センターで展示していますので見学できます。また、この石戈について詳しく知りたい方は、HP「熊谷デジタルミュージアム」内「読書室」より速報展資料をダウンロードできますので、どうぞご覧ください。(松田)



### 愛染堂保存修理事業の現況

平成 27 年度、市指定有形民俗文化財「愛染明王」を収蔵していた「愛染堂」の保存修理事業が開始しました。11月、愛染堂では足場が生まれ、12月に入り本格的に瓦替えの工事が進められています。瓦屋根は「ガルバリウム鋼板」と呼ばれる素材に変更し、屋根全体の軽量化を図り、木の構造への負担を軽減させる予定です。その他、軒廻りの改修や畳替えなどを実施する計画です。現在、本事業を運営する愛染堂保存修理委員会では工事費の充當に向けた募金活動を行うと共に、愛染堂や愛染明王の情報発信や啓発を進めています。平成 28 年 2 月の工事終了後には、愛染明王が再び同じ位置に安置される予定です。(山下)



### 諏訪木遺跡での発掘調査—寺院の歴史を確認

4 月～8 月まで実施した上之地内の宗教法人一乗院地内での発掘調査の結果、多岐にわたる歴史を知ることができました。今回の調査で、多くの溝跡が確認でき、これらは古墳時代では耕作用水路として、平安時代以降はその一部を転用して、堀として使用したと推定されるものでした。

堀跡と考えられる溝跡からは、13 世紀以降の遺物が大量に出土し、灯明皿、陶磁器、硯、板碑、瓦、五輪塔の一部などが確認されました(写真)。これらの様相から、堀跡は寺院の内堀と考えられ、遺物の一部には文字を確認できるものもありました。今後はこれらを整理して、現存する寺院の歴史と照らし合わせることも検討していきます。(腰塚)



## 市内遺跡発掘情報

### 三ヶ尻地内で新たな古墳を発見

8月から三ヶ尻地内の観音山の北側の個人住宅建設予定地の発掘調査を実施しました。ここからは、新たに2基の古墳を発見し、2基とも周溝（右写真、線で示した内側の溝）の存在を確認できました。うち1基の周溝脇からは被葬者の縁者を埋葬したと想定できる「埴輪棺」が出土しました。この埴輪棺は円筒埴輪2つの口を合わせて棺として遺体を埋葬したと考えられ、その全長60cm程度であることから、葬られたのは子供と思われます。時期は、おおよそ6世紀中～後ごろです。

この場所では、ほかに縄文時代中期の住居跡も確認されており、古墳の周溝に一部壊されていましたが、「炉」の跡がしっかりと残っていました。また、至るところで、縄文土器が検出されたことから、集落がこの周辺に存在している可能性があります。この点について今後の発掘調査で確認していく必要があると思われます。（腰塚）



### 前中西遺跡「個人住宅の調査」

10月に行った上之土地区画整理地内の発掘調査では、奈良・平安時代の掘立柱建物跡が1棟、弥生時代中期後半～後期とみられる住居跡が2軒、時期不明な溝跡が3条検出されました。これらの遺構は重なるように集中していました。弥生時代に限定して解説すると、隣接地から大型の住居が何軒も確認されているエリアですが、今回の調査区の南側（写真①左側）は遺構がほぼない空間となっています。もしや、作業場のような空き地として使われていたのかもしれない。写真②は住居跡ですが、上から左へ「し」字状に細い溝が2本ありますが、これは住居壁際に掘られる側溝です。2本あるのは、住居が拡幅して使われたことを示しています。（蔵持）



①全景（手前が東）



②弥生時代住居跡

## 連載 くまがやの古墳群

### ⑪ 広瀬古墳群 — 特異な墳形をもつ宮塚古墳を有する古墳群 —

広瀬古墳群は、広瀬地区の妻沼低地、荒川左岸の自然堤防上に所在する古墳時代後期（終末期を含む）に造られた古墳群です。古墳群は大きく二群に分けられ、現在11基が確認されており、墳丘を残す古墳も多く見られます。

東の浅間神社の社が墳丘にのる古墳を含む2基と、西の宮塚古墳及びその周囲8基の古墳で構成される群に分かれますが、前者は東に占地する石原古墳群に続く古墳群としても見る事ができます。

宮塚古墳は、全国的にも珍しい墳形の上円下方墳であり、一辺17～24mの方台の上に、直径8.5～10mの饅頭のような円形の墳丘がのる形で、その特異性から昭和31年に国指定史跡に指定されました。また、この古墳には埴輪の樹立が見られず、墳形の特徴からも古墳時代の終末期（飛鳥時代）の7世紀末～8世紀初頭頃に築造されたと考えられ、数ある熊谷の古墳の中でも最終段階の古墳と考えられています。上円部には河原石が散乱していることから葺石が葺かれていたと考えられるほか、その規模の小ささから横穴式石室ではなく、火葬骨を入れた蔵骨器を安置した石櫃のような埋葬施設が想定され、併せて、墳墓の規制がなされた大化2年（646）に制定されたいわゆる「大化の薄葬令」以降という時期であることも考えると大変興味深いものです。（吉野）



## 文化財センター通信

### ◇埼玉県民の日事業

1月14日(土)、毎年恒例の県民の日事業として勾玉作り(写真)、坂田医院旧診療所公開、星溪園お茶に親しむ会を開催したところ、あいにくの雨模様にもかかわらず、多くの方々に体験、観覧していただきました。

今回は、土曜日ということもあって家族で参加される方も多く、子供のとなりで熱心に勾玉を作るお父さん、お母さんの姿は、どこか微笑ましくもありました。また市指定文化財「星溪園」でのお茶会は、例年よりも入場者数は少なかったものの、全ての茶席を回られる方も多く、ゆっくりとお茶の世界を堪能できたようです。そして映画やドラマなどの撮影でも使用されている国登録有形文化財「坂田医院旧診療所」ですが、現在は県民の日しか一般公開しておらず、貴重な文化遺産に触れる数少ない機会ともなっております。訪れた方の中には、実際に幼少の頃診察を受けられたという人もおり、当時を懐かしむ姿も見受けられました。(小島)



### ◇市内上之で埋蔵文化財出土品見学会を開催！

平成27年11月21日(土)、市内上之の土地区画整理中央事務所において地域住民を対象とした埋蔵文化財出土品見学会を開催し、あわせて近隣で発掘調査中であった前中西遺跡の現場や復元した竪穴住居の見学会も実施しました。

埋蔵文化財出土品見学会では、上之土地区画整理事業地内に所在する遺跡から出土した縄文時代から江戸時代までの出土品約150点を展示し、見学していただきました。前中西遺跡の発掘現場見学会では、見学に来た成田小学校2年生の女の子が発掘した土の中から古墳時代の貴重な遺物を見つけてくれるという嬉しい(こちらとしては恥ずかしい…)ハプニングもありましたが、いずれの見学会も見学者の皆さんが興味深そうに見ていたのが印象的でした。(松田)



### ◇第8回地域伝統芸能今昔物語—和の風情を楽しむ—

11月23日(月・祝)、「埼玉県芸術文化祭2015 地域文化事業 第8回地域伝統芸能今昔物語」が、熊谷文化創造館「さくらめいと」太陽のホールにて開催されました。無形民俗文化財6団体、文化団体7団体、賛助出演1団体の14団体が出演し、市内各地域に伝わる伝統芸能が披露され、約980人の観覧者がありました。各団体が練習を積んだ伝統芸能や音頭などからは懐かしみのある風情が醸し出され、熊谷に根付いた無形の文化を堪能できる機会となりました。(山下)



熊谷木遣

## 文化財探訪 『坊ちゃん』先生「弘中又一」旧居跡

夏目漱石の名作『坊ちゃん』の主人公のモデルとなった数学教師「弘中又一」という人物がいます。愛媛県の松山中学校に勤務していた夏目漱石は、赴任してきた「弘中又一」と知り合います。そして、「弘中又一」の破天荒な性格とその実話体験を元にして『坊ちゃん』を書いたと言われていました。

「弘中又一」は、松山中学校を1年で飛び出した後、明治33年埼玉県尋常中学校第二分校(旧制熊谷中学:現熊谷高校)に着任し、19年間勤務します。その間の明治42年から大正8年まで、宮町一丁目(現在のさいたま地方裁判所熊谷支部南側)の借家に住んでいました。現在、その家は残されていませんが、ブロック塀に解説板(写真)が掲げられています。

『熊谷高校八十周年誌』には、「弘中又一」のエピソードが紹介されています。「ドジョウを買ったが、入れ物が無いので、かぶっていた山高帽の中に入れて持ち帰った」「荷車を引いて歩くのに山高帽にフロックコートをはおって引いていた」等々。『坊ちゃん』先生のその後に思いを馳せながら、宮町一丁目付近を散策してはいかがでしょうか。(森田)

